

911.3

ゾ  
中

猿飛家考人談

中。



續俳家奇人後卷中

官司能順

故句當 竹内玄玄一遺編

能順ハ初小燈の官司之連秋小長トて世小獨歩以貞享乃  
 帝元旦子召之連分れ懸きハ沙威のありりるわふ法  
 祝とた中あるそ時たそする向「けさ初るや筆れ海」を  
 春の水後ニ加賀大守の招きに懸トく小松梅林院ニ由紀  
 次免里以「毛蕙門」の拵トくそ居成初少不雅談數刻  
 小あふある「連能」のたがひめハ初くえやとある見不「秋風ハ  
 芒打」ある夕べうか「秋風」ハ芒打ある夕べ卯の二句と書く  
 此は所遊ハはとにこれ能者トくそけぢめをわさこれハ翁  
 も其精算に依り遊けると之元禄七年の冬翁の須白トく

續俳家奇人後卷中

故句當

竹内玄玄

一遺編

命と殞びと算く喉いそく是より死時之世の發客氏とるるは  
年六十七少及びびく、向も深く、案びる、夏成くく、古人と  
極老れ、死者多く、風流の劣り、とゆわうに、ぞか、わゆる、式、逆り  
わ、事、ふ、若、六、年、六十、と、限、り、と、あ、は、は、べ、我、も、羨、く、侍、る、と、實  
か、及、は、堪、能、の、人、も、凡、丈、の、回、純、も、べ、き、た、わ、ら、は、と、尚、時、か、た、り、  
あ、り、り、と、あ、じ

本因坊

本因ハ英流の國大垣此人吟史を海として風顔あり「早首  
みく、命のなまき、ら、ち、せ、り」「た、ま、り、大、切、子、お、ん、る、は、衣、る、り  
妻、不、後、れ、る、人」「た、ま、り、新、は、う、う、く、を、死、鏡、う、か、時、り、甚、箱  
ある人の會、進、み、く」「蒜、れ、侍、ら、き、に、考、を、あ、ら、て、と、り、あ、り、  
「考、れ、わ、る、花、の、様、を、と、よ、め、り、け、る、と、附、り、じ、う、尚、時、英、流、乃

本因坊ハ桃太郎の物語を、れ、ば、と、て、使、り、あ、る、お、侍、り、せ、と、事、を、  
考、く、志、し、り、て、同、進、け、る、は、坊、より、蒜、の、難、お、考、の、居、る、は、  
御、め、侍、り、く、「考、れ、わ、る、意、の、後、屋、の、斬、り、よ、ひ、斬、を、侍、る、斧、の  
お、ご、ぞ、算、ゆ、る、と、を、り、れ、返、去、之、れ、れ、ば、其、和、お、の、前、せ、り、  
此、も、あ、り、く、桃、太郎、の、お、白、附、と、同、ト、心、を、考、く、く、先、く、機  
精、簡、く、く、く、こ、ま、さ、く、を、屋、は、き、と、箱、も、感、ぢ、ら、れ、

天野桃隣 附 漱尾桃翁

天野氏ハ伊賀上野の人、甚、箱、の、つ、子、之、杜、業、官、を、稱、し、く、  
江戸、お、來、れ、り、初、見、桃、隣、と、い、ひ、後、桃、翁、と、改、む、と、白、堂、又  
吳、竹、軒、と、も、号、し、し、「お、桃、や、帯、も、お、ら、は、あ、の、色、」大、月、る、の、心  
り、や、淡、河、大、和、河、「及、く、り、拾、ひ、あ、つ、め、て、案、山、子、や、「初、雪  
や、人、ハ、機、嫌、ハ、斬、の、中、に、その、調、治、落、す、と、は、人、の、風、格、之、元、祿、の

紅葉如巻  歌仙

何より云 三音早  
清濁 有花押  
略

桃清改テ

桃



心造と笑に暮れ日

桃

うささく世に何事なるもあめを路

けし先河翁江の清くまうづふとそい人を佐して夜泣の歌  
宿る旅店の女房その新産雨ふ降ゆるた二人の更と出家なる  
べしとちのひねは安産の符とそふ隣いとあはれゆきとそ  
符の一向紙出て巻しけるがお産平産の祝ひありき言ひはた  
ちに出くあ人を九折に折らふ何と書けりあしけるや隣さ  
へく「さく出く満ここみせよ花は兒と菊すくあれハ遊  
とゆくる若くと大いよ嘆羨せられし又いとさうき成りこ  
に賓客を養食はこくい人もそお付お招くる折や岩熱の  
以るれば一ちくお水神を役け新き手拭ひとけけ重なり  
客うらうら後打よりて掃除はるお掛おきし手拭ひかたの  
毛見えは去ハいうふとお記せし一あ日と色しけるおふい人の  
許より礼文れあきし末に「うささく手拭置むあめさうね

とハ認免さりあれあくそ日の偷児ハ志れさるこ  
瀬尾氏ハ江戸柳系やなぎぎのりこりにま先り初め秀和ひでととあこひ  
て杜格とろりとありが後桃隣うづらのつ中に入海うみ遊あそびし其名成  
継ぎ大練舎うづら桃菊うづらと称なづけ「ひとひぢハ澗うづらのちがれや梅うづらのむ  
「たく海うづらき松うづらも福うづらむるや妻うづらのむ

逸人二川

二川ハ越中えちう留山りゅうざんの産うり先せん祖ぞより代あひりてそのまぶに休やすふけ  
人ひとつよ小江こゑ湖うみあ身みと控かせむりやとありひ或時あるときをちと形かたちひあ  
ぐる小許こちした中なかのひあつる加か慈じたあつるむそくに羈かり  
止とまるれ計けいありとすて俄あまは驚おどろき髪かみを剃そりあがら妻つま入いりとなり  
その所ところと立た去さるとそ「米こめくれる人ひとハ近ちかく花はなは香かると我われを乃  
際きり子こ小こ出でれあせり右守みぎのり中なかんく慕こり進すすむ怨うらむあくるそ海うみ

孫揚まごたかりりそそ志こころざしと遂ついにく免あつらる依より富と山やまれやうりみ一いつ字じ  
とむらび生涯しやうげいと閑寂かんじやくあつらじらるとこ

風士梅貞

梅貞うめさだハ備前びぜんお忍おん山やまの人ひといけなきより佛ぶつ社しゃをあのみ十七しち葉は  
の妻つま「山守やまのりや只ただの横よこが二三二三本ほん蕉せう菊くきくハ四よ行ぎやう柳りゅうの後のち官くわん古こよて  
け向むかをききそ意いと感かん慨がいせられとそ又また「かよせて水みづもそせ  
りりう紀きつをこあど詠あいぞしが原はら若わかく冥めい途とおむを  
むく道みち時とき備前びぜん小一人こひとりの風士かぜしと失うしなへることとまれ

澗力山

澗氏いづみぢハ京都きよとの人ひと弱冠じやくかんれ次つぎより重おも載のりのり入いる輕かろ殺ころして  
後のちハ似に船ふね手て後のちく折おり下くだり免あつ蒙もう山やま海うみと芳よし山やま後のち小こ力ちから也なり  
改かむ振しん鳩とら朝あさと号ごう次つぎ「反かへ榜ぼうや去さえり改かむらあきと「世よ免あつ

く魚の骨えたるはきぞ生身魂隠老を初ひく「紫がうくれ  
にうしあき花や冬核子紙先立ける人へ「しぞ泪顔見え  
毛菊みてもまき身はさけ六尺四寸疾く走るもの一日に数十里  
歩と盤のちがき尺餘うしと走れり夢れあし「お中あぞり  
く神人こと称せり

小沢ト尺

小沢氏ハ江戸小幡町の人吟叟よりとくを更く孤吟こしは  
も何進の年うや蕉菊と我をよます「うしよりあれと後乃  
海と号ぶ一日海小名紙改んりてあふ垂りト尺と名けら  
家これ小沢の草字紙省略せられり「とあり「うし「を離  
向多きが中に「秋れ雲ハ留士紙いりくお嫩りたり

無腸處士

世揚家又士はド免送を業うし「難波あをせり「そんごあり  
名利うし「く當世「たぐし「自らうし「外剛あり「内柔あり  
あれ我性「と固く「更か世揚れ号とあはし「し「佛社ハ宗因の  
流と波こし「とも又蕉菊の風と志「ふ「とせ家酒と出く田  
野に「苗橋ひる「とそ「月か於ふ己が世ハあり「みあし「蟹その露  
落く「これおこし「深く「庭梅との玉「ぐり「と耽り「古紙「ととも紙  
探り「見次「とり「おとあし「竊は佛士の衣箱「ある「連袂の抄  
物「れ「とと撥「く「柱に膠「し「舟か刻める「もの「使き「と「れ「ひて  
也哉抄「を「あし「や「し「手「尔「を「波の「梗「際「を「志「ふ「し「其「綴「と「同「う  
ひる「若「ハ「窺「ハ「ずん「バ「あ「る「べ「う「く「び「実「に「後「代「の「懸「檻「ある「う「を

竹下東順

竹下東順ハ江別の人其南う父之若うを「し「より「医術「を「ま

ひたの産こせしが程なく本田侯より傳祿を以て妻子  
とやしあふ漸く老ふ當んとしつるに官路をいひて市居  
小替りり倣ふとこのしんで札とさうに昔はあつた  
あと十年あまうそれは吟櫃のみてさうや「白魚や漢  
菊が園あひあひあがり」一年あもぬぎれぬりのや來の昔  
蕉菊評しそ云くは人の江の隈田お生れく武の江戸お終を  
こはうあならび大隈に於市の人あつべしと

後者吼雲

元祿丁卯のしそ秋の央バ水上の月をひと番子の沙翁と  
しそ免く淀田河はあつて清光おしとさう各内他を觀  
ひらるに仙花が後者す四房とつるの袖れくふ洒わう免  
なごしそあつるが胸と心にくうびりすれ一柳紙吐く

「若月ハ沙翁あつるす小舟る菊をほり免法人の且ん  
且はちそ句他と止ゆりそれより後ハ吼雲と陣名して  
中四房と六呼ばりけること昔一後網船屋の江鏡より水  
上月とつる歌あつりし時田金より使お來り居し書付の  
一そはりあつらんそ「水や老そくや水ももんえんそり  
かよひては免る秋の夜の月ときあえんそ目紙同ふはるの  
候ありり候

後者元兆

元兆ハ加州金沢の人お出く送と業とに社業より蕉菊お  
就く後後義の撰お加りるは免の飛揚おのづから雅情あり  
「骨采の刊れあつるも本芽うる」市中ハ物のむむや夏  
上ゆりそ中來るそや秋のそ「若くそや書本つむおのそ

わうり何れの以りや罪ある人と侮りてり己も亦不獄に付あが  
る時多牢中はくしての吟「猪のそれ強さる花のさるまこと  
「かげろふのみも許さぬ風うねきく人泪と流さぶといふ  
あとをうし初くされあうしまう裸綫の若を免る所  
とをば世をあさゆしや思ひくは果は亡命しと終る所  
と〜〜次

飭屋社國

飭屋平を請ハ尾張の人社國と仇名し菊菊丸と稱以貞享  
六年の表河箱は道後しと若井山小宅るた郡山入る宇古  
の郡しと之郷の分仙あり帰りと後何変りや罪ありと死  
刑お初りて之きに極刑を以てあ「蓬菜や赤玉のかざり橋山と  
吟せしと國主少し免るは威のあまう罪一考を減して同小

伊良古崎おわがけらる歳祀もあふまを而して流るされハ昔子  
がけ人と悼る句れしと云ふ伊良古の社國例ありは失るは  
賊人より申しあしけりしと「菊もむつもとくそ奪むとら  
足附くうれしとたづひ奪れくるむしと思ひて「羽ぬけ  
考考者ばくしとらと崎

山本荷分

山本荷分ハ尾張名古屋桑名町は恒り檀木堂と號以慈門  
の名生之年中行夏供居蘇白散「いもけあや居獲をわ初  
る人次身表日祭「こ〜毎も吾居の友のつがみくゑ石清水  
臨時祭「當ももまづふかざり橋うか灌佛「けふれりや次  
多小洗ふ仏くちら瑞年「面瘦く葵附くる髪うはし〜施米  
「打わけ〜施米を虫く〜地乞巧奠「若菜より七夕祭

石屋とよき駒迎「は女髪も旅の姿や神心之撰虫」  
紫中豆のふれも雲十月更衣「玉衣の衣之」  
五節「向ひ姫小衆之指張り追離」  
まぐろ鬼の面ふも其他よりは之に似て少雨の如  
くと蒙り「梅おとしとて懸るふらふれ」  
しきりたし

宮崎前口附此節

宮崎氏「法州大臣の人致仕」  
二之門の老成之「群れ」  
中蔵も彼の是を以て「愈々の愈」  
室廟の徳不あり「女が似せ」  
ひさしとて右の打女を中も

に梅河之と云へけに「上法」  
八月の初ふれぬ念も「流の」  
の奥中候「一申は」  
「味増」  
風流あり「中」  
世筋「梅」

権翁本節

本節「江州大津」  
禮より「権翁」  
「名月」  
其年「権翁」  
り候子「権翁」

削くく削け進ど志死す不守きたまふ夜をむくは進んば  
あまは進む一片清ひて危め終ふ節いとも脾胃うくる水  
あし死終らう死ありこそ是菊の病床は作りてこそ深切化  
人あえさるるを海と知べし

僧李由

李由字買年待州小任以秋名と亮隅上人と不進江の  
暖田小任職以庭小田根の梅と植え終る茶みとりとほしこ  
と以夜小田梅庭の号あり蕙の小拵ひて研六支考考と友に  
若く教向海と無せり「枕や痴病おさるる江代の表」を  
をき二年みその名跡うまけ借さる光菊の風流とあふ  
ととども之味終仍の彩うらあれば公あらびも打さあしが昨  
の夜と終るれと法用とあひあらし様立して菊の危と初進

しより州才のちざり流きりみよの仏は侍ある如くあも  
あく菊の幻燈菴小容居の抄を幸ひ志死りに三時の切とつと  
て佛子を耕し終小其佳境に入しと之菊粟津小病は以ち  
法の抄は年忌を物ひるとそを際終るあははと六時えし室  
永二年小寂は年四十六

磨工牧童

牧童ハ加州金沢の人捌刀の業とりとむるのたつとせり  
才小枝と蕙の小拵ひて在にその妙境に入る「枝けられきハ  
ほのく」とみうの月「種藤を海りしそく」業書や支考  
あれが為小傳くと云く牧童ハ彼が見にしく北枝ハ氏が才也  
素より耐公が才能と第ハ此進ハ嘗て既家の留書とも是才  
は略むくハ梅菊の風流とあはひけるも中江蕙の小入て時の

雅小あそびるふおたすどかびたさバツ菓に生さぬる考乃  
彼ハ梅のむの清きに轉りおれハ却のむの曇れさよる略吟  
席定會おれ人とあつびとふあとなし時居眠り致以く  
生涯の泣物こそり略貴女もあれとんさし一きぬもあれと  
汗一たまり終り兎卒の内院お祿むらんさぞきあうら  
御南翁うのそ或法師おむひて牧童ハ此老と申さ進  
し中よくて悪うらんやあしとてようさやま翁あうら  
でハあしどか御うハ生てハ光あるべくとも放佛ハ後たり  
んとしるむう一人の心を二人ののハ御てやゆらん牧童た  
よし中我そのうみ翁はゆええし時或の素子堂が「浮葉  
光紫あ蓮風情はぎきたらむとふ向れ物ううりに及ぶ光ハ  
おのれんと音に唱たらんがよしととくられしおハ何ごとも

見え侍りて時の人あれと侍りては小人の考しひあり  
てしうぬ涙もまたどりさるやうにのらん形ありれまある人ハ  
世小考ししこれハ老の故あえうむ重人の乳香の香に於て  
風雅も危うらびとふべし

瓢水居士

播陽の瓢水ハ人にあつれし富家あれども倦り不金銀と擲  
く後ほぐしうやうもむにけぬ大丈夫と富家亦或し  
の元旦は「かのちりと打火れおハ去季の物」流るや我抱  
籠ハあし山「ゆみぬのさまをてあやさるの秋そお調る  
あしあつべし平生あしき人の難波の花女を招引せんと  
云るといはれく「もふとるあをりり燈におけ蓮花葉或  
人亦達磨の賛あをれく「親以進ハ花も葉も色山れい色

下 老て他社の名もさへ忘れぬ時  
若も袖味増にけきく振のこまみくの他人があ  
らうとて「振」あのみう鳴る時名 温故森小 藤原のつみ葉  
孰水初文 藤原のそらふ不知  
の振、かのた大にふたふたりをひて玉鏡之戒ひ、初向  
「さ名とま」とて「菴翁」と「其角」とあひにぬ老のさへ  
宗田子少うとてあくはるさす

白馬散人

名も、播州加古の人他社、意風を好く上はつる元朝  
「鏡」のさへ下るほこころを今死んたも云は所と  
称び、「隠れ都」さきと「教」のさりる「教」教や明日  
とちをたふさく「可」れ系とて「干」ひ時毎る一切  
衆生悉皆成仏のまらと「監」人の辨なく靈の在る事いふ

の事、中社之と出たる以般上人の語、あは越るゆゑ  
く教向せよとて「教」教の中あつて振とて戒  
とて強他を教のたれとて定まれば「権」権から余り鏡  
さく霜秋をこ其情をまらる被書林の教亭心のつ  
のふ紙「家」家名も淋しう飛び行く船とてさへ  
優劣あふさき平ひ人あつて一時楽しむも老ての後  
願ふ事うけぬらぬに死に妻死とも先とて  
「い」はる事あつて歎かすて他社之とてとて世  
の二道とて海をさるるやうに教へて意重なる教十  
金とて出さる田代七か此典「と」りて中「所」の暮乃  
狂ふ「世」をわくわくする状子の太極の道とて老あ  
とてさへとて隠れ若くは似てぬ述懐とて尚時評とてさへ

の好りたるよしと後よりぞ人の知りしと

稻津祇室

稻津氏の祖波の人ほど先乃不入し時ハ青流と依名をりか  
しより家世不脱り又符文をもたし先り多志てより諸回  
と種歴はるの志いでさくゆづ皇州早雲寺ありて宗祇法  
師の墓前より移り發せし切り入るしとあれより祇室と改む  
その時の偈ふ七顛八倒五十二翁蓬頭薙卻明月清風と又りか  
「我があももうみあつきの石の上並ふ東奥羽城の石の折し  
やうく江戸いにて暫く深川は仮居に揚屋の口辞「森ねくまる  
留におそつく紙子かあ梅屋安へゆりやそ「梅はうりも紙  
ひく程の志ひもはし女達磨の画賛を好まれてそのらんうら  
らんがと猫虫しとく「九年何若界十年はああらも妙法寺乃

大心禅師あれとすくしとく「禪意はうあしとく「深く貴

嘆せしれしとく「後洛北紫野おは先り以ハ散雨江戸千の秋ま

混じりこりせし紫野のあむとく「先之映多浪華より

江戸へありしゆの途中若根湯本の里においしとく「殺し享保十

八年四月之遺偈に舉手動足平生神通鉄牛破裂音信不通

事を釋はるの程か「あれ世をたぬりしとく「死ねるあり

地獄津ぐしの極歩と助その門人併と祇法師の墓を造り

たて玉首山人と追号し又堂と深川八幡社内におゆる

といふ門系多うる中に江戸をて四時款と稱はる説あり

長谷りいしある祇壇祇の衣邦空隨魚費

長谷部柳居

長谷部柳居ハ江戸の人を危く宦途を避て閑寂小くしとく





大典祥昨その暮迄小玉瀾配夫行と出れりも是等此森茂と  
やりのあるべし

泉石老人

泉石の浪遊の人た不好と結ゆは「ついきけなきこなり庭ハ  
梅ごうけ」まつしり「まふしりまふしり」まふしり「奢られて又まびらき  
紙子うる曉年乞食とんき」しり「神遊ハねとあのおもむく  
おむく」と性つ子小酒をたしみる物も物するは或時酒がふ  
と揚せしき「飯朝のひとがさしむ身のみうとあはせある  
哉翁多先生博物多識りしき」しき「書法も達せしれしき  
その次知しむる者ありしとくや佛社ハ又その猪飼りや也

續他家奇人談卷中終



